FREE PAPER Hoo-JA! フリーペーパー ホージャ!
新居浜＆西条の地域情報
2025年（令和7年）8月30日（土）発行／Vol.504

短期集中連載 最終回

市立新居浜商業高校 甲子園 準優勝の軌跡

～ 50年前、一番暑かった新居浜の夏 ～

今から50年前、1975年（昭和50年）開催の「第57回全国高校野球選手権大会」いわゆる「夏の甲子園」で、新居浜商業高校が初出場で準優勝を成し遂げた。その快挙は市民に感動と勇気をもたらし、それまで**「アライハマ」**と呼ばれていた**「新居浜」**の名が、全国に知れわたる出来事となった…。

この連載は平成31年2月～令和元年7月、「神郷公民館だより」に掲載された連載（執筆：渡部 強氏）に編集部が加筆・修正したものです。 ※文中敬称略

追いつ追われつの決勝戦。高校野球史に残る好ゲーム

「甲子園が終わると夏が終わる…」と人々は言う。しかし、二つの台風に襲われ全日程から5日間順延し、決勝戦は8月24日。甲子園上空には薄雲が広がり、雲の切れ間から淡い日差し。試合開始前でも気温は30度に満たない初秋を感じる中での決勝戦となった。

同日はプロ野球公式戦「阪神ーヤクルト」が甲子園で組まれており**「決勝戦を行わず両校優勝」**のデマまでもが流れた。しかし「高校野球優先」を理由に「阪神ーヤクルト」は雨天中止に準じた扱いとなり、予備日に振替開催となる。

決勝戦の2日延期、そして24日は日曜日ということもあり、待ちに待ったのが高校野球ファン。試合開始30分前に6万を超える人波で膨れ上がり、内外野席、そして通路まで人が溢れ立錐（りっすい）の余地もない。阪神電鉄は全駅に「甲子園満員」の張り紙を出し「当日券は全て売り切れました」とアナウンスを繰り返すも、押しかける人の波は止まない。「満員承知」の上で乗車券を販売したため甲子園に入場できない人が続出、場外にたたずむ人は1万人以上に達した。

決勝戦の相手は千葉県・習志野。1967年に全国優勝も成し遂げている強豪。また前年、1974年夏の甲子園は同じく千葉県の銚子商業が優勝。「2年連続、真紅の大優勝旗を千葉県へ」と期待も大きかった。

一方、夏の甲子園初陣の新居浜商。「初めから無欲で戦ってきたので、雨の影響はない。初出場で決勝まで勝ち残れただけでも十分」と鴨田監督。しかし**「ここまで来たからには勝ちたい。選手も口にこそ出さないが、勝利への執念は私と同じ…」**と続けた。

新商の三塁側アルプススタンドは6千人を超える応援団で満員。23日夜にバス8台で新居浜を出発。泊まり組の生徒応援団、一般応援団と合流、市長、市議会議長、商工会議所会頭らもスタンドで応援する大世帯。

6万人を超える観衆で膨れ上がった甲子園

午後0時58分、プレイボール。新商は二回表、無死一、二塁のチャンス。送りバントの後、秋月のヒットで1点先制。四回表、習志野投手・小川の乱れと近藤のヒットで2点を追加し3－0。新商のペースかにも見えた。しかし五回裏の習志野の攻撃。一、三塁のピンチで打者を一塁ファールフライに打ち取るが、その一瞬をつかれタッチアップで1点を返される。その後も一死満塁、打者をピッチャーゴロに打ち取るも村上がはじきランナーが生還。満塁は続き、四球で押し出しの同点。さらに続く打者にもヒットを打たれ4－3と逆転を許してしまう。新商にとって「魔の五回」。

七回表の攻撃、二死から村上、続木、竹場の3連打で同点。追いつ追われつの展開に興奮のるつぼと化す応援席。同点で迎えた九回裏、守る新商。二死まで追い込むもランナー一、三塁。村上の投げた一球はライナーでライト方向へ弾かれた。ライトを守る竹場も懸命にグラブを出すが、無情にも数十センチ前でバウンド。三塁ランナーがホームを踏み、習志野のサヨナラ勝ち、熱戦の幕は閉じた。

	一	二	三	四	五	六	七	八	九	計
新居浜商	0	1	0	2	0	0	1	0	0	4
習 志 野	0	0	0	0	4	0	0	0	1X	5

閉会式で野口主将が受けた準優勝盾を先頭に、ナインは大観衆が見守る中をグラウンドを一周。三塁側のファンの前に立った選手は、勝利に負けた悔しさを通り越し、全力を出し切った後のすがすがしい顔。大観衆の歓声と拍手が湧く。

試合後、鴨田監督は選手に向かって「お前たちはよくやった。絶対に泣くな！」と言いながら泣いた。それにつられて選手も泣いた…。

当時の新聞記事はこう締めくくる。

だれがこの初陣新居浜商の快進撃を予期したであろうか。しかし初陣ながらその一戦一戦を力強く突き進んだ。新居浜商は力一杯戦った。この一戦、優勝戦らしい内容の好試合であった。

新居浜の一番暑い夏が終わった…。